

# 「小さな拠点」での買物支援

## — JA美馬・木屋平支所の取組み —

主事研究員 寺林暁良

徳島県美馬市木屋平地区は、美馬市の中心部から30kmの山道を登った先にある山間地である。国勢調査によると、1955年に6,507人であった人口は、2015年には639人と10分の1にまで減少したほか、65歳以上の高齢者の割合も58.4%に達するなど、過疎・高齢化が特に激しい地域のひとつである。

こうした状況を受け、同地区には、行政や医療、福祉、買物といった日常生活に必要なサービスの拠点(小さな拠点)である木屋平複合施設が開設された。そこで、同複合施設で買物支援を担うJA美馬・木屋平支所の取組みとその成果について紹介したい。

### 1 木屋平複合施設の設立経緯

同複合施設の設立は、老朽化・耐震問題を受けて市の総合支所が旧木屋平中学校の校舎へと移転したことを契機としている。移転に合わせて生活サービスに関わる組織・団体を集め、地区の「小さな拠点」として整備することになったのである。

14年11月には、地区内の組織・団体で構成される検討委員会が発足し、「地域の方々の生活を支えるサービスの拠点」「地域活性化の拠



木屋平複合施設の外観

点」「緊急時の拠点」というコンセプトを実現させるため、順次協議が進められた。施設の改修には国土交通省の『「小さな拠点」を核とした『ふるさと集落生活圏』形成推進事業』の補助金を活用した。

こうして17年3月に設立した同複合施設には、第1表のように、生活サービスにかかわる各組織・団体が入居している。旧総合支所に入居していたJAも複合施設の開設に合わせて移転し、総合サービスの提供を担っている。

### 2 JAと商工会による買物支援センター

#### 「ゆずの里」の共同運営

高齢者の買物支援は、木屋平複合施設の開設にあたっての課題のひとつであった。地区内には食料品を販売する商店が数軒あるものの、各集落に分散しているほか、店主の高齢などを理由に継続も危ぶまれていた。そこで美馬市は、16年12月に美馬市買物支援施設条例を制定し、同複合施設内に買物支援センター

第1表 木屋平複合施設の入居組織・団体

3階	まちづくりNPO、図書室、調理室
2階	歯科診療所、市総合支所、会議室
1階	診療所、薬局、郵便局、商工会、JA、買物支援センター
運動場	ヘリポート



食料品や農業資材が並ぶ買物支援センター「ゆずの里」

を設置することに決めた。

この買物支援センターの運営を担うことになったのが、JAと商工会である。特に、JAには旧総合支所の時代に農業資材などの販売を行っていた実績があった。そこで、JAと商工会は共同運営を行うための組織として指定管理団体「ゆずの里」を設立し、同複合施設の開設に合わせて買物支援センターの運営を開始した。

JAと商工会は、商品の品ぞろえや運営方針について随時協議を行いながら「ゆずの里」の運営を行っている。ただし、同複合施設に商工会の職員がいるのは週に1度である。そのため、日常的な「ゆずの里」の運営フォローは、職員が常駐するJAが担っている。

### 3 買物支援センターの運営状況

買物支援センターは、美馬市の買物支援事業の一環であるため、JAや商工会のコスト面での負担は大きくない。テナント料は無償であるほか、レジ担当者の人件費や光熱費などの運転費用、冷蔵庫や冷凍庫などの設備費用については市から補助が出ている。

センター開設当初は、JAで販売していた農業資材などをそのまま販売していたが、その後は順次、利用者のニーズに合わせて品ぞろえを広げている。開設後に実施した利用者アンケートを踏まえて日配品(豆腐や牛乳など毎日配達されるチルド商品)や飲料、調味料、洗剤などの販売を開始したほか、商工会側からの提案もあり、シカ肉やブルーベリーの加工食品などといった地元産品も商品のラインナップに加えている。

商品の仕入れや買物支援センターへの配送はJAが担っている。利用者からは商品の種類や量を増やすようにとの要望もあるが、過疎地ゆえに在庫調整が難しく、両者のバランスを取ることは苦勞しているという。高齢化率が高いがゆえに米や肥料などの戸別配達の要望も増えており、その対応も今後の課題である。

### 4 JAの役割発揮が拠点機能を高める

複合施設内で他の用事を済ませるついでに利用できる買物支援センターは、利用者からも便利だと好評である。JAが役割を発揮して同センターが運営されていることで、木屋平複合施設の「小さな拠点」としての機能がさらに高まっている。

また、この事例はJAと商工会との連携事例としても注目できる。地域の持続可能性を高めることは、その地域を基盤とするあらゆる組織・団体と共有できる目標である。多様な組織・団体との連携のなかでJAの役割がさらに際立っている事例だといえるだろう。

(てらばやし あきら)